

Title	<書評> Una Ellis-Fermor : The Irish Dramatic Movement (1954)
Author(s)	山本, 修二
Citation	英文学評論 (1955), 2: 172-175
Issue Date	1955-03
URL	https://doi.org/10.14989/RevEL_2_172
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

書評

Una Ellis-Fermor:

The Irish Dramatic Movement (1954)

この本の初版が刊行されたのは一九三九年のことであるから今さら新刊紹介でもないと思うが、その当時は不急不要の文学書などはすでに輸入禁止になつていて、たとえば私の手元にある同年発行の同種の本 Lennox Robinson が編纂した *The Irish Theatre* のごときは「北京法文図書館」という書票が貼付されていて、これは忘れもしない当時北支に従軍していた友人からの好意の贈りものであつた。ついでながら「北京法文図書館」などというと、僕の友人が何か泥棒でも働いたようだが、その意味は英訳すると French Bookstore, Peking, China ということで、原価 7s. 6d. の本を 8s. 6d. で買つてくれたことまではつきりしているから、この点は安心である。

戦後に発行された本はどうにか手に入らなくなったが、入手の困難なのは、この時代から戦争中に至る本で、どこ研究室でも大きな空白を生じているから、それが再版によつて一冊でも満たされることは有難いが、その上この本にはもう一つの特徴がある。今までもアイルランド演劇に関する本は何冊書

かれたか知らないが、すぐに頭に思ひ浮ぶ Boyd でも Byrne でも Corkery でも Gwynn でも Molone でも、みんなアイルランド人によつて、しかもアイルランド文芸復興に深い関係を持つ人々によつて書かれてきた。そのことはこれらの本の信拠性を増すもので文句をいう筋合はないが、やや客観性に乏しいという心配がある。一方アイルランド人以外によつて書かれたイギリス近代劇の本というものも沢山あつて、その中には必ずアイルランド近代劇の一章はあるが、この方はどれもこれもイギリスの近代劇とアイルランドの近代劇とを全く別もの、それぞれ孤立した事実と考えていて、各々を比較研究したり、相互の複雑な交流を検討したりはしていない。

ここに紹介する Una Ellis-Fermor の本の特徴は、著者がその序文でも言つているように、あくまでも 'outsider' の考察であるところにある。「この演劇を外部から、すなわち世界演劇史を背景として見ることは、外国人だけに可能である」という信念をもつて書かれている。だからこの著者は、アイルランド近代劇の起つた素地ともいふべき一八九〇年代におけるイギリス近代劇がどんなものであつたかを検討するために第二章をこれに献げるのみか、巻末の附録第二には 'A List of Plays Produced in London between 1890-9' を掲げて、それを裏書きしようとしている。

十九世紀末のイギリス近代劇が Ibsen の影響を受けたこと、これは改めて説くまでもないが、実は今日になつて見るとその影響の受け方に問題があつたので、この著者に言わせると、当時のイギリス劇界は、「この Ibsen という」その当時最も偉大であつた一人の poetic dramatist の poetry」を見落して、*A Doll's House* や *Ghosts* などのいわゆる社会劇のみに注目して *Brand* や *Peer Gynt* などの詩劇、又は晩年の *The Wild Duck* から *When We Dead Awaken* に至る心理劇または象徴劇を無視してゐた。もつともこういつたイギリス写実劇や Ibsen への見方は、三十年代にイギリスの詩劇復興が叫ばれてからは珍らしいものでなくなつたが、しかしこうした context の中でアイルランド劇を見直すということは、まだあまり企てられてはいない。もつとも realism を主流とするイギリス近代劇に対して、アイルランド劇が poetry を主張したことは、これも常識になつてゐるが、しかしその当時でもイギリスに poetic drama の伝統は亡びてゐた訳でなく、Priscilla Thoulless の *Modern Poetic Drama* (1934) と同じ本を見れば、Stephen Phillips を始めとして Flecker や Masenfeld や Drinkwater や Hardy や Bottomley の名前が綿々として続つており、無論 Yeats の名もその中に見出されるが、彼の詩劇がこれらの人々と、いつちやにされてゐたところに、もう一つの混乱があつた訳で、Yeats

はあくまでもアイルランド近代劇の指導者として考えなければならぬと思う。

この著者をして言わせると「W. B. Yeats において、アイルランド劇は、その創設者、鋭い事業家、勇敢な闘士を見出だしたのみならず、それがなくてはこの運動が不毛に終つたであろうと思はれる幻想的詩人を見出したのであつた」。この詩人の幻想は、ただの幻想として終らないで、着々実現されていつたのだから、全くうそのような話であつた。たとえば彼の幻想の一つに、悲劇に性格は不要だというのがあつた。今世紀の始めにおいて、演劇に性格の必要なことは誰一人として疑うものはいなかつた。評者のごときも、そういう演劇論の中に生長して、あるとき演劇に性格は何が故に必要なのだらうという疑問を生じて、いろいろの本にあたつて見たが、どれを見ても、とにかく性格は必要だと書いてあるだけで、それが何故必要であるかというこの初学者の切なる疑問に答えてくれるものはいなかつた。

ところが Yeats の *Plays for an Irish Theatre* という本を讀むとその序文のへき頭に――

「詩劇においては、演劇と抒情詩との間に対立があるといはれてゐる。なぜなら抒情詩は、それを本で讀んだ時にどれほど諸君を動かそうとも、それは動作を妨げる、とこれらの批

評家は考へる。しかしながらわれわれが二三世紀さかのぼつて、演劇の偉大であつた時代にはいると、性格はおぼろげとなり、時には消滅して、そこにはゆたかな抒情感があつて……」

という書き出しで性格無用論が述べられていた。つまり評者は性格必要論を求めて、その無用論にぶつかつた訳だが、「法悦の辺境にやどる *chimeras* ……」とか「夢の誇らしいはかなさ……」とか「月光かがやく心象のむれいる海……」だとかいふもろもろの殺し文句に魅惑されて、この序文を読み終つた時には、私の演劇観が一変していた。それは性格が必要だとか無用だとか、そういつた個々の問題をはなれて、およそ芸術上の定説などというものには、それに劣らず有力な反対論が存在するということであつた。

しかしアイルランド新劇運動の強味は、この本の著者に言わせると、このような詩人の幻想が、単なる幻想に終らないで、それが実践によつて裏付けされたことであつた。この点で重要なのは *Lady Gregory* の存在で、彼女は幻想とか定説とかいふものを一切もたず、いわば彼女の演劇論とは実践そのものに他ならなかつた。そこでたとへば上述の性格無用論であるが、彼女はその実践によつて *Yeats* の幻想の正しさを認め、悲劇では「運命が主役であるから、舞台の上の俳優は多くの性格を持

つことはできない」と言つている一方に、喜劇では性格の必要なことを再確認して、ここでは「性格が入用だが、その訳は私に解らない。しかしとにかく性格を創造すると、それが自分のちいぢやな足を踏み出して、自分の道を歩き始める」と補足している。

改めて説くまでもないが、アイルランド新劇運動は、過去の一切を御破算にして、すべて最初から始めたのであるから、いろいろの実験が行われ、この運動全体が一つの *workshop* であつたと言えるのだつた。ここでは度々合作ということが行われた。例えば *Cathleen ni Houlihan* や *The Pot of Broth* は *Yeats* と *Gregory* との合作であつたし、*The Workhouse Ward* は *Gregory* と *Hyde* との合作、*The Poorhouse* を彼女が改作したものであつた。もちろん合作ということはイギリスの演劇史で珍らしい現象ではなく、*Shakespeare* と彼をめぐる多くの劇作家や、又はあまりにも有名な *Beaumont* と *Fletcher* などの例があるが、これらの合作を考察するときに忘れてはならないことは、それが必ずしも *a + b* であるだけでなく、*c* という新しい要素が附加されていたかも知れないことだ。この本の著者をして言わせると――

「ある一人の作家が合作者として存在すれば、必ずや彼の他の作品でわれわれに知られている適確な特徴によつて、それ

がわかるに違いないとか、又はある一つの戯曲に、われわれに親しみのない一つの要素が現われていれば、それは今までに知られていない偉大な作家の存在をさし示すものだとか、主張するのは余計なことだ。二つの精神の融合から生れる化合物というものが、上述の二つの主張をば無効なものにしてしまう。又これによつて、たとえば Beaumont と Fletcher などの合作において、それぞれの劇作家が書いたと思われる個所を、一つ一つより別けるといふようないさかやりきれない仕事から、われわれが救われることにもなるだろう」

しかしこの workshop における何よりも大きな実験は、彼等の芸術の媒体——すなわち言語という面に現われた。この点においても、Yeats の幻想は正しかった。彼はまずジャーナリズムによつて汚されていない言葉を求め、それをアイルランドの西部に在るゲールック語を知っている人々の語る英語の中に見出した。しかもこれを実践によつて裏付けしたものは相も変らず Lady Gregory で、彼女は二冊の伝説集 *Cuchulain of Muirtheanne* と *Gods and Fighting Men* によつて、上述の方言を文学としてどう生かすかの模範を示した。むろんこれが完全な舞台語となるためには Synge の天才を必要としたが、とにかくこれらの人々の協力によつてアイルランド新劇運動が花咲いた。こう考えるとイネーツがバリの宿舎においで Synge

に語つたといわれる西のはてにある Aran 島へ行つて、まだ表現されていない生活を表現せよといった忠告が、一時の思いつきやでたためでなく、これも深い洞察を含んだ「詩人の幻想」であつたことがわかるのである。

——山本修二

Aldous Huxley :

The Doors of Perception

たしか昭和廿九年五月号か六月号かの「芸術新潮」の海外新刊紹介欄で、オルダス・ハクスリーの新著「知覚の戸」*The Doors of Perception* が挙げられ、これは著者が「メスカリン」*Mescaline* と云う新薬を飲んでその幻想の体験を記録した書物であると云つた意味の敷衍に互る簡単な紹介記事を読んで、さてはハクスリー先生！ 廿年代の懷疑と分裂の暗闇の中に解決を求めて盛に活躍した往年の元氣も衰え、近年はひたすらに煩惱障滅と正覚の光明に安住を求めようとする神秘主義に墮したと云われる先生、遂に麻醉薬中毒患者になり下つて、これはその体験をものしたのか、それとも文字的に連想すれば現代の「阿片溺愛者の告白記」が出現したのか知らんと早速一本求めて読んで見た所、豈凶らんや、そこに見られるものはドゥ・